

第二一六回ペン川柳会

令和四年五月三十一日

お題 「香・香る」

■ 三春 (火酒)

ウオッカ

夏祭り色香きわだつ裾さばき

香臭の嗅ぎ分け老いのバロメーター

■ 塚田 (拿々)

だだ

美人行く残り香追ってついふらり

悔いは無し香車のごとき人生に

■ 曾山 (酪帝)

めいてい

色香失せ男を超えてたくましく

お新香と白いご飯の夢ばかり

■ 八木 (明迷)

めいめい

コロナ禍で香典泥棒廃業し

香水も白旗上げた加齢臭

■ 稲宮 (井波)

いなみ

雪の加賀脂粉香ったひがし茶屋

蒲団では香りにおせび後はなし

■ 西川 (酔雅)

すいが

孫が来る加齢の香り逃がす朝

換えられぬ女の香り残る部屋

■ 細谷 (損得)

そんとく

残り香を嗅いだだけでも猥褻罪？

臯月賞風に香るは外れ券

■ 大野 (だし)

風香る五月の空も過去の夢
信長の麝香の夢も露と消え

世話人 塚田 實(拿々)
だだ

■ 松谷 (零門)
れいもん

盛り場に香り求めて午前様
柑橘の香り広がりお裾分け

■ 安藤 (晃二)
てるつぐ

アテネなら座ればウーゾアニスの香
香水もルージユも迫りベガス更け

■ 山縣 (安兵衛)
やすべえ

静岡は新茶の香りさつき晴れ
日本よか新酒新茶の香そろい踏み